

パンタナール通信

一般社団法人 南北米福地開発協会 会報

2022年7月1日 226号

世界平和地球村の建設と自然環境の保護

未来を担う！ 滝川哲盤さんに聞く



前列左が滝川さん。レダ基地で共にパクーの放流作業に携わった人々と。2022年5月27日

「レダはやればやるほど発展するところだ」

レダ基地でパクーの養殖プロジェクトを中心的に担っている、滝川哲盤（たきかわのりやす）さんが、6月中旬に一時帰国しました。早速インタビューを申し入れ、書面による回答をいただきました。

Q まず、お名前と生年月を。

A 滝川哲盤、1992年10月8日生まれです。

Q 初めてレダに到着したのはいつで、その時のレダの印象は？

A 2015年、私が大学生の時です。初めてレダに降り立った瞬間の感動は、今でも忘れられません。パラグアイ川が大きくて景色が雄大でした。

Q レダの素晴らしさは、ずばり、何ですか？

A 無限の可能性を秘めていることです。ご存じの通り、レダは僻地の中の僻地です。環境的に見れば、ほぼ年中暑く、インフラが行き届かない地域であり、人が手を付けたがらない地域です。

しかし、だからこそ、何か一つ壁を乗り越えた時の喜びと達成感は格別なものです。また自分自身が思う以上に周りの地域や人々に与える影響は大きいと感じます。レダはやればやるほど発展するところなんです。

一つ何かを『成す』ということは強い決心と諦めないう気持ちが必要ですが、その気持ちで取り組めばレダは将来大きく発展する可能性があるところだと強く感じています。

Q そもそも、何故レダを志したのですか？

A 私は大学生の時、レダに来たことがありました。初めてのレダは毎日が刺激的でした。当時70歳前後のご高齢の先輩方が汗水を流しながら第一線で仕事をされながら、レダの将来をまるで少年のように目を輝かせて語っている姿に私は感化されました。しかし、当時、青年はほとんどいなく、将来の不安を感じた私は、いつかもう一度レダに来ることを心に誓い帰りました。そして、社会人生活を経て、ちょうど仕事を辞めたタイミングで、ある方からお誘いがありました。そのお話を聞き、仕事に迫られた日々で忘れかけていた、大学生時代にレダで過ごしたときの熱い思いが蘇りました。そして、「ここでもう一度やってみたい！」と思います、レダ行きを決意しました。（次面に続く）



伊達勝見氏の40日追慕礼拝。レダ研修所2階にて。6月14日



レダ基地におけるパクー稚魚の放流。5月27日



動画があります。
Facebookにて、
ご覧ください。



稚魚をすばやく丁寧に取り出す。5月27日



養殖池の稚魚を徐々に囲い込んでいく。5月27日



クラウドファンディングで集めた資金で購入・設置した新しい冷凍庫。-30℃に冷凍保存が可。

新しい冷凍庫の操作パネル

滝川さんへのインタビュー（一面より続く）

Q レダで最も嬉しかったことは何ですか？

A パクーを販売できたことです。レダに来て一年以上が過ぎるなか、私はまだパクーを販売できていないという焦りがありました。構想はありましたが、色々な事情があり、思うようにはいきませんでした。そんな中、念願の冷凍トラックが到着し、そのタイミングでパクー販売に強い意欲のある青年たちが現れたことも追い風となり、初めてバイア・ネグラでの販売に行けたことが何より嬉しかったです。

Q パクーの養殖プロジェクトで、最も難しいことは？

A 人を動かすことです。パクー養殖では、水揚げ、加工などを従業員ほぼ総動員で行います。立场上、従業員に指示を出す局面が多々あるのですが、気を使うことも多くあります。何よりチャマココの従業員との信頼関係を得ずに指示を出しても、中には言うことを聞いてくれない人もいます。ですから私は、常に彼らと同じ目線に立つように気をつけています。従業員たちに指示を出す前に、まずは彼らと同じ土俵に立って働き、仕事面でも、人格面でも、認めてもらわなくてはいいけません。人を管理することは、養殖魚を管理すること以上に難しいと感じます。

Q 今回、日本で何をしたいですか？

A 日本では、国内の養殖会社への訪問や、海外の養殖場に足を運んで、実際にレダで生かせる生産、加工、販売までのノウハウを勉強したいです。

Q 将来の抱負をどうぞ。

A まずはレダの養殖を発展させると同時に、レダ近隣のインデイヘナの村での養殖を行うことです。その先の将来は、他の貧しい国にも赴き、魚の養殖技術を伝え、その地域、国の食糧問題の解決に貢献することです。

Q 今、世界の支援者の皆様に最も伝えたいことは？

A まだ、不足もありますが、今後とも温かく見守っていただけたらと思います。そして皆さんと一緒にレダを造り上げていければと思います。

つくる責任・つかう責任

和田賢一



私たちがこれまで考察してきた国際連合(国連)のSDGs(持続可能な開発目標)の12番目は「持続可能な消費・生産形態を確実にする」というものです。これは、私たちにとって身近な問題ではないでしょうか。

人類は、長い歴史の中であらゆる物を生産して、それを消費することによって、快適な、便利な、幸福な生活を営むことをめざしてきました。イギリスから始まった産業革命や石油を主力としたエネルギー革命、はたまた近年のAI（人口知能）の発達などによって豊かな消費文明の恩恵に浴しています。

しかし、高度な消費文明を築き上げた人類は、さまざまな問題を抱えてしまったとも言えます。例えば、物品の生産時、その原材料が石炭・石油等を基礎としたものであれば、プラスチック製品として市場に出回ります。プラスチック製の袋や食器がゴミとして捨てられ、環境破壊の一因となります。生産と消費の間に、さまざまな問題が起こっているのです。

昨年（2021年）、プラスチック資源循環促進法が成立したことによって、12項目のプラスチック製品の有料化や再利用が義務づけられました。これにともなう、規制の対象となったフオーク、スプーン、ナイフ、ストロー、ハンガーなどを使っているコンビニやホテル、クリーニング店などは、漸次、紙製やその他の原料による製品に置き換わっています。レジ袋の有料化はその象徴的な現象です。ゴミとなつて残るものではなく、焼却可能なものにとつて替わる試みがなされています。

ここでさらに問題が生じています。一般社団法人「プラスチック循環利用協会」によると、2019年の国内のプラスチックごみ排出量850万トンのうち、プラスチックの素材としての再生利用は22%で全体の約5分の1に過ぎません。残りは焼却されているので、排出された二酸化炭素は地球温暖化の

プラスチック製品は、これまで私たちにとって簡単に使えて都合のいいものでした。生産側が大きな責任を負いつつ、変化を余儀なくされているのであれば、消費側もこれまでにない試みを迫られているのです。したがって消費者側もこれまでにない脱プラスチック生活へと生活スタイルを変化することが求められるのではないのでしょうか。それが「つかう責任」ということに関わってくるのでしょうか。



ブタランド

生ゴミを家畜に与える：食料資源の古典的再生利用法の一つ。

然と調和したライフスタイルに関する情報と意識を持つようにする」と念の入れようです。

それでは、食品ロスがどれほどあるのでしょうか。環境省の調査によると、わが国では令和元年度に、約570万トンの食品ロスが発生。内訳は家庭から約261万トン、事業者から約309万トン発生したとされています。

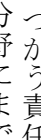
もつと詳しく述べると、家庭では食べ残し117万トン、直接廃棄107万トン、過剰除去38万トン。事業者別のデータでは食品製造業128万トン、外食産業103万トン、食品小売業64万トン、食品卸業14万トンの順です。この数字を見るだけでも、どこで食品ロスが多く生じているか、お分かりのことでしょう。それは、家庭の食卓の上と食堂のテーブル上ということになるうか思います。

では食品ロスを減らすには、どうすればよいのでしょうか。環境省はそのホームページで次のように提案しています。

まず「飲食店で食事するとき」、個人、家族、知人など食べ切れるだけ注文し、残れば、店側に持ち帰ることができるか聞いてみる。「買い物のとき」、冷蔵庫の確認の上、買いすぎに注意し、消費期限をチェックする。「調理のとき」、食べ切れる分だけ調理し、食材が余った時は、別のレシピを考える。「保存するとき」は、保存期限を確認して、配置方法など工夫する。「食べきれないとき」は、フードドライブなどへの寄付やお裾分けを検討する。何となく驚くほど、こと細やかに紹介しています。それほど、食品ロスは深刻な問題と捉えたいと思います。

事業者などからの食品ロスについては、関係省庁や各自治体などからさまざまな要請や指導がなされています。「つくる責任」についても論議がされていると聞きます。

身近な点について「つくる責任」・「つかう責任」を考えてきましたが、さらに巨視的な分野にまで私たちはこの視点を拡大していく必要があります。一つの村をつくる上でも、街をつくる上でも、自然との調和と持続的な環境創造に欠かせない視点といえるでしょう。（つづく）



第23回パンタナール1日研修会を開催

5月28日(土)、東京都渋谷区代々木の国立オリンピック記念青少年総合センター、センター棟402室において、当法人とNPO法人地球の緑を守る会の共催で「第23回パンタナール1日研修会(ワンディセミナール)」を開催しました。感染予防のため、検温、手指消毒、マスク着用、換気、ソーシャルディスタンスの厳守などの対策を徹底しました。

ワンディセミナールは半年ぶりの開催となりました。隣接する緑濃き神宮の森を越えて流れる、初夏の空気が心地よい一日、代々木の会場に50名が集いました。初めての参加者も多く、中には遠路はるばる駆けつけてこられた方々もいらっしゃいました。

セミナール実行委員長は、大滝順治氏。司会進行役は、和田賢一氏。プログラム全体の骨格はこれまでとほぼ同じでしたが、様々な特色がありました。

「パンタナール精神」に込められた真の愛、養殖をはじめとする各プロジェクトの推進を通して得られてきた知見の共有、5月13日にバイア・ネグラ市で



国立オリンピック記念青少年総合センターにて。5月28日

●「提唱者の思想とレダ開拓の歩み」
●「パンタナールにおける植林、ほか」
高津啓洋 N P

○地球の緑を守る会代表理事、●「第10回パクー稚魚放流式の報告」藤生輝彦青年局長、●映像「レダ移住」と「青年ボランティア」島田賢二さん、●「レダユースの活動」角田愛里香共同代表、●「レダの現状と今後の展望」中田欣宏代表理事、●入会案内●質疑応答●感想文●閉会の挨拶(16時終了)

参加者たちの感想文には、「レダプロジェクトにいつそう関心を深めました」「自分も近いうちにレダに行ってみたいです」「レダに感動して涙が出てきました」などの言葉が綴られていました。

参加者の皆様、講師陣の皆様、準備から実行までご尽力されたスタッフの皆様全員に感謝いたします。

2022年全国総支部長会議を開催

6月3日午後、東京の会場で、2022年全国総支部長会議を開催しました。東京、神奈川、北日本、関西、九州の各総支部長、および当法人の理事、監事の役員が集い、マスクを着用したままですが、対面で親しく話し合うことができました。

会議はまず、伊達勝見氏の逝去に対して哀悼の意を込めて全員で黙祷を捧げた後、伊達氏の入院から今日までの経過と今後について、中田代表理事から説明がありました。また、新任理事(和田、大滝)の紹介、新事務局長(和田)と新青年局長(藤生)の紹介があり、これら新しい人事体制への期待と要望とを、中田代表理事が述べました。

続いて、レダに移住した島田家庭の最新映像が上映されました。そして、会議の核心部である、各プロジェクトと全体取り組み状況を、パワーポイントと映像とで共有しました。主な項目は、パクー養殖と販売の現状と計画、食品加工工場設立の準備状況、西嶋氏によるEコマース構想、環境保全牧場整備事業の進捗状況などです。そして各プロジェクト活動を支援するための特別キャンペーンについて話し合い、その推進に向けて決意を固めました。

休憩後、第10回パクー稚魚放流式典の報告、この7月に出版するチャパボラ(約8か月の奉仕活動)と第22回青年奉仕隊の準備状況、新世代人材(レダの各プロジェクトを担っていく人材)の確保、と続きました。そして閉会后、親しく懇談の時間を持ちました。

一般社団法人 南北米福地開発協会 事務局

〒213-0001

神奈川県川崎市高津区

溝口3-11-15

岩崎ビル4F

電話: 044-829-2821

FAX: 044-829-2820

支援金振込口座: ゆうちょ銀行

記号10280 番号61349751

一般社団法人 南北米福地開発協会

Eメール: office@asd-nsa.com

ホームページ: https://asd-nsa.com

Facebook: https://www.facebook.com/ledaproject.jp/

会員の皆様へ

会員の皆様には、周囲の方々にレダ・プロジェクトを紹介し、入会の案内をしていただければ幸いです。紹介用のパンフレット(印刷済み)、および入会申込書は、左記の事務局にお申しつけください。



入会申し込みは、左のQRコードから、グーグルフォームでも行えます。パソコンでは、下記のURLにアクセスしてください。

<https://asd-nsa.com/nk/>

レダ・プロジェクト紹介用 パンフレットPDF版



紹介用パンフレットは、ネットでも入手いただけます。

スマホなどの端末で、または印刷してクリアファイルに入れてどうぞ。



<https://asd-nsa.com/sk/>